

氏 名	むね た よし ふみ 宗 田 好 史
学位(専攻分野)	博 士 (工 学)
学 位 記 番 号	論 工 博 第 3221 号
学位授与の日付	平 成 9 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	イタリアの歴史的都心部の再生を可能にした都市政策の研究

論文調査委員 (主 査) 教 授 三 村 浩 史 教 授 加 藤 邦 男 教 授 高 橋 康 夫

論 文 内 容 の 要 旨

歴史的文化遺産を保存継承しつつ市民生活と産業の活性化を実現することは現代都市計画がもっとも基本とする課題である。本論文は、開発か保存かという対立論議を超えて、魅力ある歴史的都心部＝チェントロストリコの再生を成功させたイタリア1970年代以降の都市政策の形成とその社会的背景について総合的に研究した結果をとりまとめている。

内容は、序章と本文7部及び終章の全21章より構成されている。

数次にわたる綿密な実地調査、ローマ大学での研究と計画実践、研究者・専門家との交流と関係者・機関への面接調査及び膨大なイタリア語文献資料の収集と解説という広範な方法に基づいて、実証的かつ問題提起をともなう都市政策論の構築を目指している。

序章は、研究の目的と方法を述べている。第1部では、今世紀前半における近代都市計画の普及とそれが招いた歴史的都心部の空洞化やスラム化を批判して、1970年代の地方分権化を契機にして、各自治体が取り組みユニークに実践してきたルネッサンス政策の理論と実際の過程について詳述している。その内容は、通常の紹介では伝わらないイタリア都市計画法・制度と社会的背景の生きた近・現代発展史をなしている。

第2部からは、主要な政策課題別に、市民理念形成とそれを具現化する政策策定過程を、実地に即しつつ解明している。まず第2部では、歴史的景観を保存するために建築物の外観を厳格にデザイン規制する一方で、生活環境に対する住民のニーズを充足するという課題に応じて、イタリアの都市計画専門家が考え抜いてきた、凍結的保存ではなく、あるパターンに即した改造や更新を可能にするという建築類型学＝ティポロジア理論が有効に成り得た過程を実地に検証している。

関連して、第3部では、郊外住宅団地の建設を専らとしてきた公営住宅事業を都心部の再活性化に適用するに至った都市計画と住宅政策の結合過程を述べている。さらに、この実現を可能にしてきた既存老朽建築物ストックを快適な集合住宅に修復し整備する供給手法の開発が、民間供給を含む住宅市場全体に及ぼした波及効果を評価している。

第4部では、既存の利害関係やセクショナリズムを超えて多分野を結合するユニークな都市政策が案出され、幅広く支持されてきた社会的基盤であるイタリアの自治体＝コムーネ行政および地区住民評議会の役割について、都市国家時代以来の独自の発達過程をふまえて、現代の分権化状況の実地調査を含めて解析し、合意形成の方法に関して、日本からみるイタリア都市計画の解説に有力な手がかりを提供している。

第5部では、都市産業政策の流れを解明したもので、歴史的都心部保存と都市型産業の発展を検討し、特に職人産業と中小商工業が、中心部の業務地区化にともなう排除や不動産投機による地上げに曝されることなく、伝統的な都心集積立地条件を保持することで、イタリアンブランドの産地として成長を遂げ、かつ歴史的町並み保存と相俟って都心部の文化的経済的な魅力を高めた政策過程を明らかにしている。

同様に、第6部では、歴史的文化遺産を保存し、かつ伝統的都市型産業の活性化に成功した都心部の魅力を資源とする都市型観光活動＝アーバンツーリズムを受け入れる滞在施設や観光関連サービス産業の立地が増大し、新規投資の上流化が進むというイタリア型ジェントリフィケーションの実態と問題点を明らかにしている。

第7部は、以上の各主題別の取り組みが、歴史的都心部の保存的開発政策として総合化される上で、地区住民協議会、職人産業組合及び自治体行政とのパートナーシップの果たした役割について述べ、そのような支持基盤の上で実践されるイタリア都市計画の特徴を論じている。

終章は、序章の目的と方法に照らして、イタリアの都市政策・都市計画から得られた知見を総括し、風土及び社会的条件が異なるわが国等との比較を加えて、歴史的都市の保全的開発の総合的立案の可能性を考察している。

論文審査の結果の要旨

本論文は、歴史的な文化資産を活かして都心部を活性化する現代都市政策に関する研究である。これを先進的に実現してきたイタリアの総合的まちづくりの特徴と普遍性とを、次のように解説し考察している。

1. 近代都市計画の破綻から歴史的都市のルネッサンスへ、四半世紀にわたる政策の転換過程について、綿密な現地調査と広範なイタリア語文献の解説により、初めての詳細かつ系統的な理解をもたらした。
2. 生活環境を向上させつつ町並み景観と建築の質を保存する上で、建築類型学＝ティポロジアに始まり都市の再生的保存に至る独自の市街地整備理論の発達に着目し、実践事例の検証から、その意義と普遍的な適用条件を明らかにした。
3. 都心部にまず公営住宅投資を行い、景観保存と人口回復を実現した初期の都市政策と、それを具体化する上で既存建築物を快適な集合住宅に修復転換する供給技法の開発が果たした重要な役割を見出した。
4. 職人産業振興と都心保存の一体化が、文化観光魅力を高め、居住階層と商工業の上流化現象＝ジェントリフィケーションを促すという現象を市民と市場の発展矛盾の形態としてとらえ、次段階の計画課題を示唆した。
5. 居住、産業及び都市計画を総合するユニークな文化的活性化策が案出された社会的基盤として、計画行政の分権化と自治体・地区住民評議会での徹底した参加による支持力形成があったことを、立案過程の実証的分析を通じて明らかにした。

以上、本論文は、イタリアの都市政策・都市計画に関する初めての本格的研究であり、同様の課題をもつ世界の都市政策モデルの形成に大きく寄与するものと評価できる。よって本論文は、博士（工学）の学位論文として価値あるものと認める。また平成9年2月24日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。